

資産に関する認識把握

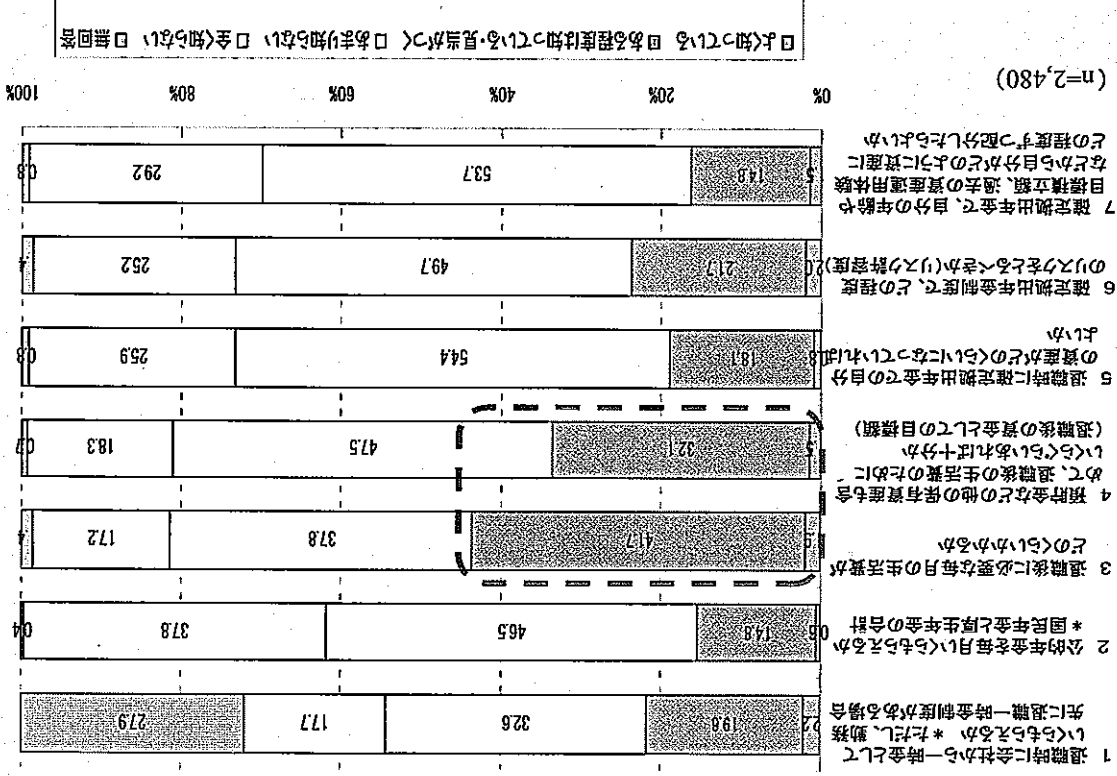
◆生活レベルの認識把握は高い

◆一方、退職金や年金など制度の認識把握は低い

確定拠出年金での資産運用認識(Q1)

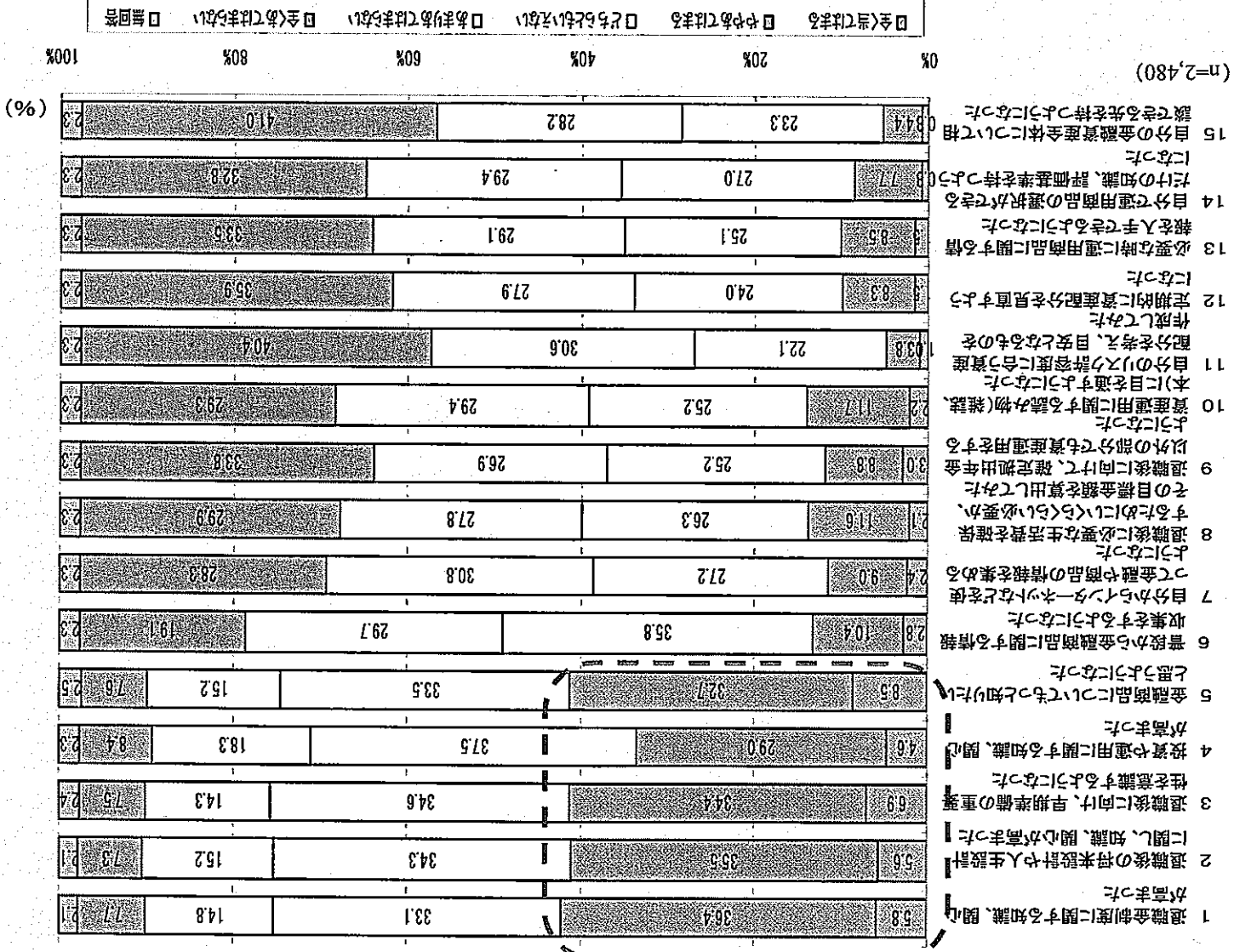
「よく知っている」
「ある程度は知っている」

50代男性 50代女性
44.6 29.4 (%)



確定拠出年金導入後の意識変化

確定拠出年金導入による意識変化(Q13)



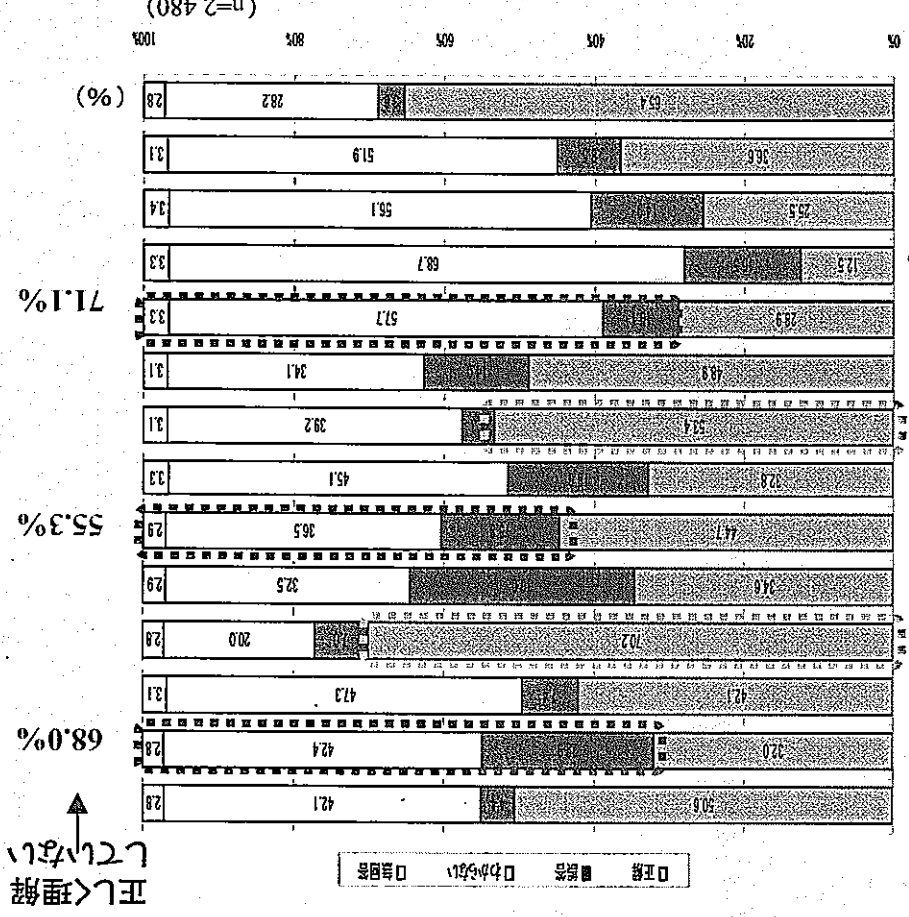
(n=2,480)

制度および投資信託に対する実際の理解度

◆概念的な把握はなされているが、運用実務に関する知識は低い

制度および投資信託に関する理解度(Q12)

- ①商品の利回りが1%、B商品の利回りが3%で毎月複利運用する時、運用する期間が長ければ長いほど、この利回りの差は小さくなる
- ②特定拠出年金で運用している時、運用収益に対して課税される
- ③多くの人の資金を集めて「ファンドマネージャー」と呼ばれる専門家が特定拠出年金加入者に代わって運用している商品を投資信託という
- ④ある程度の利回りを得ようと思えば、価格変動が伴うリスク商品を選ぶ必要がある
- ⑤特定拠出年金では、預貯金や利率保証型は、途中で解約しても元本が確保される商品である
- ⑥債券に投資する商品は、一般的に株式に投資するよりもリスク・リターンともに高い
- ⑦投資信託は、投資会社など関係機関が破綻した場合、特定拠出年金加入者の財産は保証されない
- ⑧少額でも分散投資することができるのが、投資信託の特徴である
- ⑨自分に合った運用商品を選ぶ際は「自分でリスクをどれだけとれるか」だけを考えれば充分である
- ⑩基準価額は、投資信託を購入したり、売却したりする場合の基準となる価額である
- ⑪「ベンチマーク」とは、投資信託の資産の大きさを測定する際に使われる指標のことである
- ⑫「アクティブ型」の投資信託とは、市場の平均と同じ様な動きをすることを目指して運用される商品のことである
- ⑬特定拠出年金において、積み立てている資産の配分変更は年2回までしかできない
- ⑭自分の資産残高を確認するには、定期的に送られてくる「加入者レポート」、または「資産残高明細書」を見るしか確認する方法はない



正しく理解していない

正答数	元本確保派	投資信託派
10~	16.5	30.9
7-9	32.7	36.6
4-6	28.9	21.0
0-3	21.8	11.5

自己認識と実際の理解度の関係

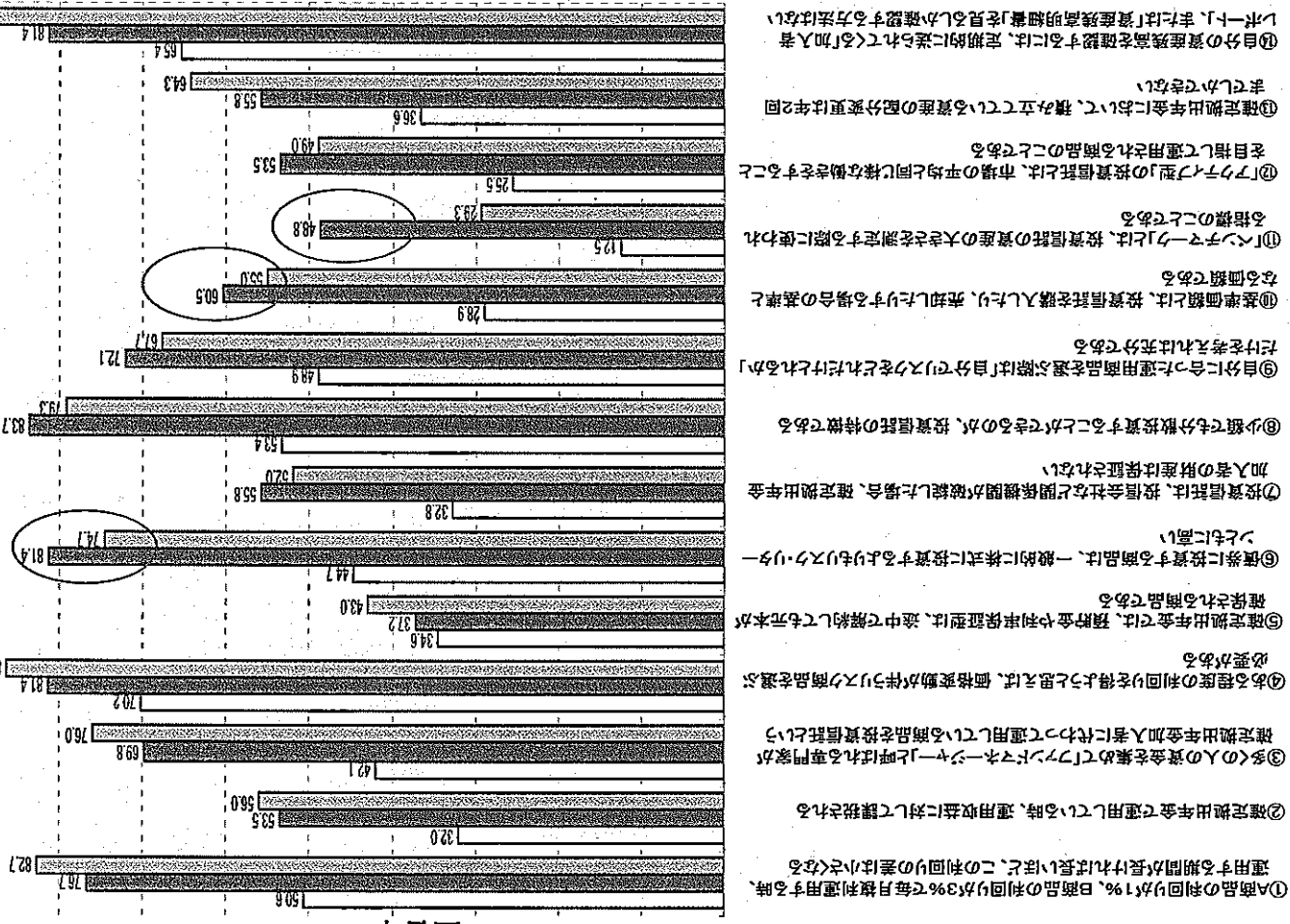
◆投資信託について知識のある人は総じて理解度が高い

制度および投資信託に関する理解度(Q12)

[VS. 投資信託の理解度認識(Q11)]

全体
 投資信託をよく知っている
 投資信託を大体知っている

(n=2,480)



正答率

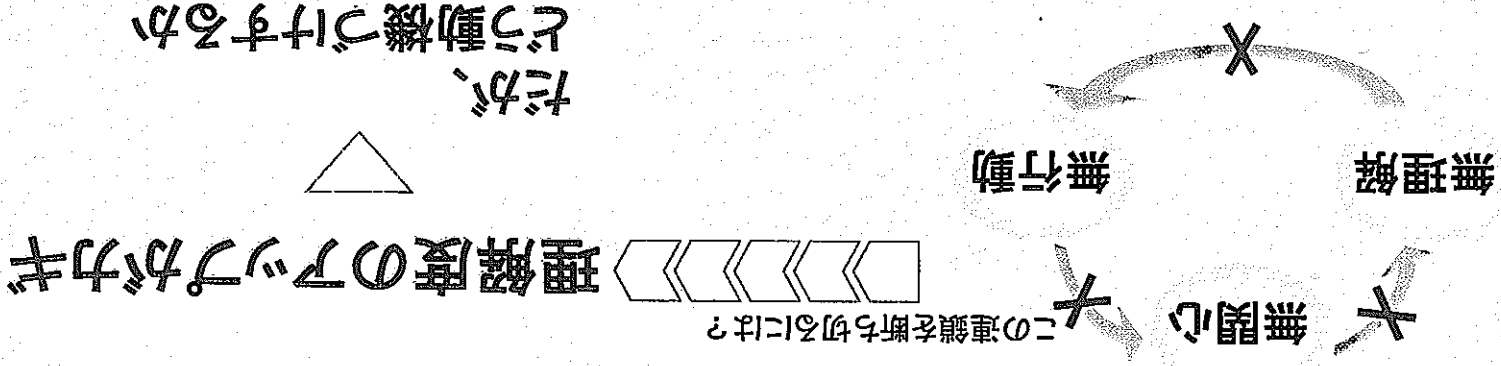
(%)

2004年企業型確定拠出年金 加入者実態調査 15

◆ポイント

- ・40代の意識は進んでいる。危機感もある。
- ・身動きできない50代。
- ・確信的保守だが、資産が十分貯まっているかを認識しているかは疑問。
- ・若者層、女性への対応が急がれる。

◆「3無いの悪循環」からの脱却



◆継続教育の課題

・一律な動機づけには限界がある。世代別の動機づけをすべきなのではないか。

・頭での理解を体で実行するための、体感的プログラムなどが有効か？

・「習うより慣れる」

・そして常に、「忘却のリスク」の克服

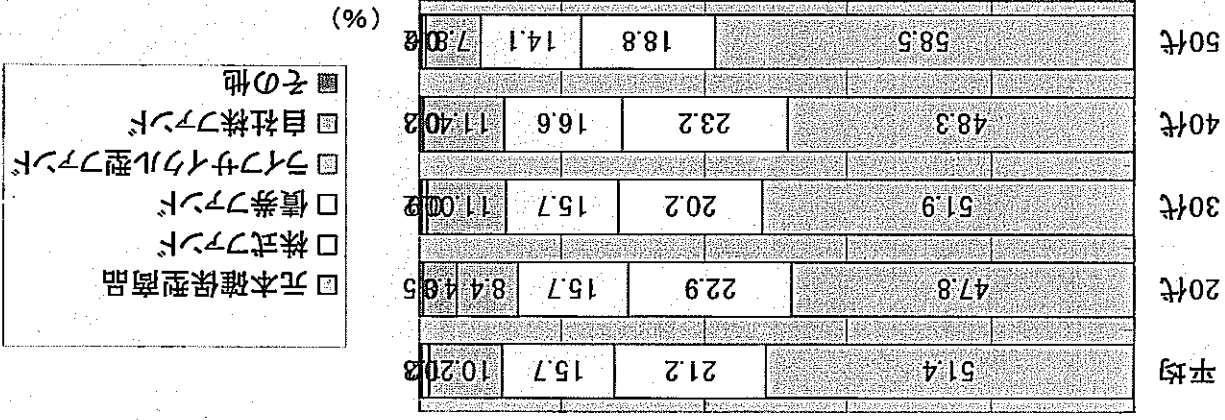
⇒ 「10年後の爆弾」を抱えてないか？

⇒ まずは予防と早期発見

<ご参考>資産残高割合の日米比較

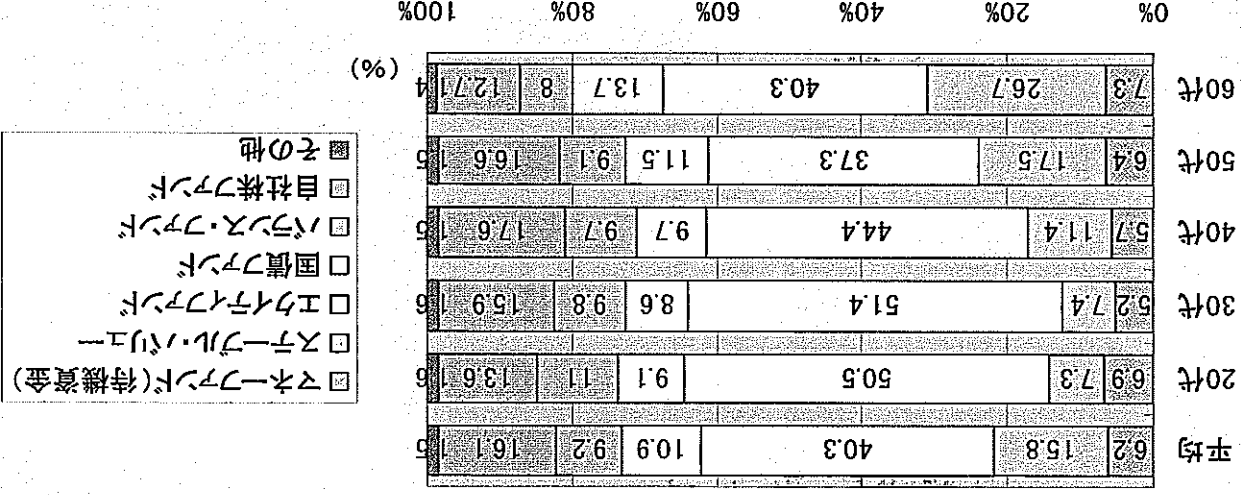
◆日本の元本確保型が50%を超えているのに対し、米国は15.8%

日本



- 元本確保型商品
- 株式ファンド
- 債券ファンド
- ライフサイクル型ファンド
- 自社株ファンド
- その他

米国



- スネーファンド(待機資金)
- スターウォール・バリュース
- エクイティファンド
- 国債ファンド
- バランス・ファンド
- 自社株ファンド
- その他

出典: Investment Company Institute, Perspective Figure, Average Asset Allocation of 401(k) Accounts by Participant Age, 2002, September 2003, p.4